八・勝林寺の閻魔堂

山本　泰秀

勝林寺（しょうりんじ）所有の閻魔堂の所在地は、県道東京平方線に接した地点であった。古くは江戸時代より存在し、元々勝林寺所有であったが、明治時代の廃仏毀釈により、土地は上知された。この間、閻魔堂に祀られていた閻魔大王は勝林寺に移されていた。その後、土地は内務省より勝林寺へ譲与されるに至った。

さて、閻魔とは地獄の主神、冥界の総司として死者の生前の罪を裁くと考えられている。元々はインドの古い神であり、インド最古の文献（リグ・ヴェーダ）に現れた神で、そこでは閻魔（ヤマ）は虚空の遥か奥に在る住所に住むとされ、後、時に死と同一視されることもあったが、死者の楽園の王・死んで天界にある祖先を支配する神と考えられていた。後にヤマ（閻魔）は黄色の衣を着て、頭には冠を被り、手に捕縄を持ち、それにより死者の霊魂を縛り、自らの国へ連れて行く。つまり、下界を支配する死の神である。その名は征服者又は、処罰者の意味とも考えられる様になった。

ところで、この閻魔堂の敷地で平成末迄営業していたのが石川商店であった。明治期に石川三津蔵氏に貸したのが始まりで縄と菰（こも）をキッコーマン醤油に、一般には莚（むしろ）・薪・炭・練炭等も販売した。［縄や］というのが石川商店の屋号である。後年、米とプロパンガス・石油も販売していた。

そもそもの始まりは、明治期に勝林寺二十三世彦龍住職がこの堂宇と敷地の借り手を探したことである。最初の候補者は中島興兵衛氏の父親の中島正治氏であった。正治氏は次の様に語っていた。『百姓は作り上手、売り上手でなければ、人より以上の収入を得ることが出来ない。需要と供給によって物価が変動することが経済の原則で在ります。』正治氏が何を根拠に物価の変動を予測したかと言うと大将軍の星廻りによって予測したそうである。この星は東西南北三年間程その位置にあるそうであるが、三

年過ぎると移動すると言う事である。その移動の仕方で物価の変動を予測したそうである。ある年に自家生産の米と藁工品を三ヶ年売らずに倉庫に積み込んで、高値が来た時に三倍の価格で売ったこともあったそうである。このことを聞いた彦龍は正治氏の商人としての才覚を見抜き、商人になる様勧め、正治氏に土地を貸そうとしたわけである。この事の分かる書き物がある。地元増林の中島興兵衛著【二・二六事件にまきこまれて　苦悶の日々】の文中に記されている。要約すると次のとおりである。

増林の勝林寺という寺が在り、その裏に畑が在ったので畑仕事に行くといつも住職が呼んで下されお茶を接待してくれたそうだ。その時いろいろ懇談した際に、住職の言う事には『中島さんは、普通の人と違った特別の才能が有るので、百姓をやっているより商人になった方が良いと思う。資本が無ければ私が貸してあげても良い。』と言ってくれたので、三人の易者に占ってもらったところ、確かに住職さんの言う通り商人になった方が金は儲かるが、健康を害すると言われて断念したということであった。これは、閻魔堂の貸し借りの時の二人だけの話である。その後、当時は石川さんの土地であった現在の勝林寺の前の駐車場と勝林寺の土地であった閻魔堂の土地を交換し、閻魔堂の土地は石川さんの土地となり、現在に至っている。

私が思うに、正治氏が占い師に彦龍住職との話をしなければ、石川商店でなく、中島氏の一族の誰かが商売を行っていたかもしれない。遠い遠い昔の話である。

今、閻魔大王と奪衣婆（だつえば）（三途の川のほとりにいて、死者の衣を奪い取る鬼女）は、勝林寺本堂の位牌棚の一角に鎮座されている。

「こしがや案内図」（越谷市広報広聴課発行）使用

勝林寺の閻魔堂跡の場所を示す地図

勝林寺の閻魔大王